

「底が突き抜けた」時代の歩き方 433

二千年の時空を流浪してきたユダヤ人とは、どのような人々であるのか

「ユダヤ人の数は人類のわずか1%にも満たない。輝く大銀河系の中の小さな星屑のように目立たない存在のはずなのに、彼らは常に話題になるし、注目を浴びている」と、作家のマーク・トウェインは書いたという。実際、ユダヤ人はビジネス、政治はもちろんのこと、学術、文化……など多方面でその才能を豊かに開花させてきている。『週刊現代』（03. 8. 16）は『ユダヤ人大研究』と題する特集の中の、「世界を動かしたユダヤ人たち」の中見出しで、各界を代表するユダヤ人を概観している。

〈**政界**〉では、古くは大英帝国のインド支配を完成させた大物政治家、ベンジャミン・ディズレーリ（1804～81）から、ロイド眼鏡がトレードマークの元米国務長官、ヘンリー・キッシンジャー（1923～）まで、多彩な人材の輩出。「資本論」のカール・マルクス（1818～83）や、レーニンと共にロシア革命を主導したレフ・トロツキー（1879～1940）、労働組合運動の先駆者、サミュエル・ゴンパーズ（1850～1924）と列記するだけでも、革新（革命）への志向性をユダヤ人が強く持っているのが感じられる。

〈**ビジネス界**〉はユダヤ人の独壇場といっても過言ではない。国際金融資本グループの祖で、ただの一枚も肖像画が残っていないことで知られるマイアー・ロスチャイルド（1743～1812）、ビジネスの天才と称され、ローティーンの頃から証券売買で名を成した実践派経済学者、デービッド・リカード（1772～1823）。フランスの自動車王アンドレ・シトロエン（1878～1935）や、マーケティングやPRの手法を駆使して世論作りの天才といわれたエドワード・バーネイズ（1891～1995）。世界一の通信販売会社「シアーズ・ローバック」を築いたジュリアス・ローゼンウォルド（1862～1932）や、ジーンズ「リーヴァイス」の始祖、リーヴァイ・ストラウス（1829～1902）。巨額のマネーを動かすヘッジファンドで一躍有名になった稀代の相場師で、9・11以降のブッシュ政権を激しく批判するジョージ・ソロス（1930）。

〈**マスコミ界**〉では、NBCを全米最大級のネットワークに育てた「テレビの父」、デービッド・サノフ（1891～1971）や、世界に冠たるロイター通信を創設したポール・ジュリアス・ロイター（1816～99）。ピューリッツァー賞で有名な新聞王、ジョゼフ・ピューリッツァー（1847～1911）。

〈**学術界**〉では、ユニークな視点が発揮されるこの分野はとりわけ、ユダヤ人の独壇場

であり、相対性理論を樹立したアルバート・アインシュタイン（１８７９～１９５５）や、量子力学の礎を築いたニールス・ボーア（１８８５～１９６２）、この二人を代表とするユダヤ人によって現代物理は完成された感がある。梅毒を治す特效薬を開発した、現代免疫学の父といわれるパウル・エールリヒ（１８５４～１９１５）、避妊用のピルを開発したグレゴリー・ピンカス（１９０３～６７）、精神分析学のジャンルを確立したジークムント・フロイト（１８５６～１９３９）。コンピュータの生みの親であるジョン・フォン・ノイマン（１９０３～５７）、原爆開発のマンハッタン計画を主導したロバート・オッペンハイマー（１９０４～６７）、円盤レコードを発明したエミール・バーリナー（１８５１～１９２９）。

〈音楽界〉では、交響曲『大地の歌』を作曲したオーストリア生まれのグスタフ・マーラー（１９６０～１９１１）、２０世紀を代表する指揮者、レナード・バーンスタイン（１９１８～９０）。反体制を歌ったフォーク歌手、ボブ・ディラン（１９４１～）。スウィング・ジャズの第一人者、ベニー・グッドマン（１９０９～８６）。以上の大物と並列するには遜色があるかもしれないが、エドワード・サイードと一緒に、イスラエルのユダヤ人とパレスチナ人の和解を目指して、中東の、多くはイスラムの若者である演奏家たちのオーケストラの演奏会を開いてきた、イスラエル国籍をもつユダヤ人のピアニスト・指揮者、ダニエル・バレンボイムもここに記しておく。

〈美術界〉では、色彩の魔術師の異名をとるマルク・シャガール（１８８７～１９８５）や、エコール・パリを代表するアメデオ・モディリアーニ（１８８４～１９２０）。

〈映画界〉では、チャーリー・チャップリン（１８８９～１９７７）や、２０世紀フォックスを創設した映画王、ウィリアム・フォックス（１８７９～１９５２）。実在している人物では、映画史上最大のヒットメーカーであるスティーブン・スピルバーグ（１９４７～）や、現代最高の脚本家との誉れ高いウディ・アレン（１９３５～）。

〈文学界〉では、１９世紀ドイツのロマン派詩人、ハインリヒ・ハイネ（１７９７～１８５６）や、『失われた時を求めて』のマルセル・ブルースト（１８７１～１９２２）。

『変身』『審判』のフランツ・カフカ（１８８３～１９２４）。全体主義を生み出す現代社会の病理を剔出した思想家、ハナ・アーレント（１９０６～７５）や、通信によく登場しているスーザン・ソンタグ（１９３３～）や、世界的な言語学者で、とりわけ９・１１以降ブッシュ政権のアメリカに対する辛辣な批判を展開しているノーム・チョムスキー（１９２８～）。

ユダヤ系アメリカ文学という系譜もあり、『さようなら、コロンバス』のフィリップ・ロス（１９３３～）や、戯曲『セールスマンの死』のアーサー・ミラー（１９１５～）、『裸者と死者』のノーマン・メラー（１９２３～）、ノーベル賞受賞のソール・ベロー（１９１５～）やI. B. シンガー（１９０４～）などが活躍。

以上の著名なユダヤ人以外にも、ウォルト・ディズニー会長のマイケル・アイズナー、

デルコンピュータを創業したマイケル・デル、アラン・グリーンSPAN米連邦準備制度理事会議長、インテル創業者のアンディ・グロブ、ファッション界の雄であるカルバン・クラインなど、^{そうそう}錚々たる顔触れが一線に浮かび上がってくるし、更に、ナチズムのユダヤ人絶滅政策によって、1933年から44年の間にアメリカに移住した人のなかで、知的職業者は約2万5千名とされ、優れた多くの学者や芸術家たちの移住はアメリカの学問や芸術の水準を急速に高めるのに貢献した。文学者のトーマス・マン、指揮者アルトゥーロ・トスカニーニ、物理学者エンリコ・フェルミ、経済学者ヨゼフ・シュンペーター、宗教哲学者パウル・ティリヒらが、その代表であった。

『週刊現代』の「ユダヤ人大研究」は、`なぜカネ持ちが多いのか なぜ頭がいいのか、と率直に疑問を発し、《ビジネス、政治、学術、文化……あらゆる世界で覇を競うユダヤ人の成功の秘密はどこにあるのか》、その謎を探る紙面になっている。先に羅列した世界的な知の巨人のみならず、世界的にも著名で有能な人材を輩出するユダヤ人という民族、あるいは人種には誰もが驚きを感じているだろうし、彼らの実力はユダヤ人に対する好悪の感情を超えたところで認めざるをえないだろう。少なくともユダヤ人が各界での成功者を数限りなく産み出しつづけているという事実は、彼らが自らの民族の内部に肥沃な土地を蓄え、裾野を広げていることを意味するにちがいない。記事の冒頭は「カネ持ちの40%がユダヤ人」の見出しを掲げて、具体的な数字を抛り所に実態を探っていく。

《アメリカの大富豪を保有資産でランクづけした上位400家族のうち、ユダヤ人が23%を占めるという。上位40家族に限れば、実に40%がユダヤ人だ。全米の人口に占めるユダヤ人の割合は、わずか2%ほどに過ぎないにもかかわらず、である。

昨年、小柴昌俊さん（物理学賞）と田中耕一さん（化学賞）がダブル受賞して話題を呼んだノーベル賞に関しても、ユダヤ人は凄まじい実績を残している。二人の受賞で、日本人の受賞者は計12人となった。ところが、ユダヤ人の受賞者は'01年までの累計で医学賞45人、物理学賞31人、化学賞22人、経済学賞13人、文学賞10人、平和賞8人の計129人も存在するのだ。

ユダヤ人の人口は全世界で約1500万人程度と見られ、比率にして世界人口の0・2%ほどに過ぎない。日本人の世界人口に対する比率は1・9%。ユダヤ人の受賞者数が飛び抜けて多いことは火を見るよりも明らかだ。

まさにユダヤ人は富と知性の力で世界をリードしている。彼らはなぜ頭がいいのか。なぜ富豪になれるのか。（中略）

かつて経済誌『フォーブス』が報じた「世界の億万長者トップ400」では、先のマイケル・デルをはじめ、全体の15%となる60人をユダヤ人が占めた。ニューヨーク在住のジャーナリスト、パトリック・クラーク氏はこう話す。

「ニューヨークは自他ともに認める世界の中心都市ですが、もしユダヤ人の貢献がなか

ったとしたら、`世界の首都、の看板は降ろさざるを得ないでしょう。メトロポリタン・ミュージアムには富裕なユダヤ人実業家たちによって寄付された絵画があふれているし、ニューヨーク・フィルを世界一流のオーケストラに育て上げたのはユダヤ人であるレナード・バーンスタインです。破綻寸前に陥ったカーネギーホールを救ったのも、ニューヨーク・タイムズを経営しているのもユダヤ人。ニューヨーク市のあらゆる部門でユダヤ人が活躍し、根底を支えている。ニューヨークならぬ、`ジューヨーク、（「ジュー」はユダヤ人の意味）と呼ばれるのも無理からぬことです」》

ユダヤ人が成功を収める理由は、必ずしも彼らがユダヤ人であるからではないという。つまり、ユダヤ人にのみ特別に《天賦の才が宿っている》わけではない。なぜなら、ユダヤ人とは《ある特定の「人種」を指すものではな》く、《ユダヤ人とはユダヤ教を信仰する人々のことであり、世界中のいたるところに、さまざまな人種にまたがって存在している。つまり、遺伝子を介して優秀な素質を子々孫々受け継いできた一族ではないのである。》そうだとするなら、彼らの《優秀な素質》は一体どのようにして培われてきたのか。記事は、それは《彼らのたどってきた歴史にある》という。

《少数民族であるユダヤ人は紀元70年に自国が滅ぼされて以来、1948年にイスラエルが建国されるまで、長いあいだ国土を持つことができなかった。世界各国に離散し、その土地土地の人々と交わりながら、何代にもわたってユダヤ教の教えを子孫に厳格に伝えてきた。アジア系ユダヤ人や、アフリカ系ユダヤ人といった人たちが、世界中で暮らしている由縁である。

アメリカ在住のユダヤ人法律家でユダヤコミュニティのための社会奉仕活動に従事するマイケル・シャピロ氏はこう話す。

「ユダヤ教には、聖書の解釈や討論をまとめた『タルムード』と呼ばれる大著があります。ヘブライ語で『偉大な研究』を意味するタルムードは、われわれユダヤ人の生活の規範となる重要な書物です。自分たちの国を持たずに散り散りになっていたユダヤ人にとって、聖書とタルムードこそが祖国でした。子供たちは、親から戒律や慣習について教えられ、ユダヤ教の教会に通ってラビ（ユダヤ教の僧侶）の教えを仰ぐ。そうやって成長するうちに、自分をユダヤ人として強く意識するようになっていくのです」

タルムードを学ぶ前には、たとえばこんな問いを投げかけられるという。

「二人の少年が煙突掃除をしたところ、一人は顔が真っ黒になり、もう一人の顔はきれいなままだった。顔を洗うのはどちらか」

正解は顔のきれいな子。相手の少年の汚れた顔を見て、自分の顔も汚れているはずだと思ふから、という。一筋縄ではいけない知恵を問われる。これらの問いを乗り越えて、初めてタルムードを学ぶことができるという。》

この問いはなるほどと思わせる頓智的な類にみえるが、一体なにを伝えようとしているのだろう。記事はその先には踏み込まないが、《相手の少年の汚れた顔を見て、自分

の顔も汚れているはずだと思うから》、顔が真っ黒な少年ではなく、顔のきれいな少年のほうが顔を洗うとして、一体それがどうしたのだろう。本当に顔を洗う必要があるのは顔が真っ黒になった少年であるから、この問いは顔が真っ黒な少年はどのようにして自分の顔が汚れているのを知ることができるのか、という方向へと歩を進めなくてはなんの意味もないだろう。おそらくこの問いから我々が読み取らなくてはならない教訓は、相手に映しだされる自分の顔を見てばかりいてはダメだ、ということであろう。顔が真っ黒な少年が自分の顔の汚れに気づくためには、相手の顔から判断するだけでなく、それ以上に自分の顔が汚れていることを自分で気づくようになるなにかを自分のなかにもたなくてはならない、ということになるかもしれない。

《時代時代や環境に合わせ、タルムードには常に新たな内容が書き加えられてきた。今ではトラック1台分にも及ぶ膨大な量だという。最後の1ページが常に余白としてあけてあるのも「偉大な研究」の特徴だ。

ユダヤ人成功の秘密の一つがこのタルムードに隠されている。ユダヤ人の家庭では、子供が7〜8歳になると母親が必ずこんな質問をする。

「異教徒に襲撃されて、命からがら逃げ出さなくてはいけなくなったとき、何を持って逃げるか」

この質問に「おカネ」や「宝石」と答えてはならない。カネも宝石も、奪われてしまえば完全に失うものだからだ。正解は「教育」。物とは違い、教育は、生きている限り誰も奪うことができない。タルムードの説くところに基づき、教育が施されることになる。ユダヤ人が重視する成功へのキーワードの第一は教育である。

アメリカで「ジュウィッシュ・ママ」（ユダヤ人の母）とは、日本の「教育ママ」を意味する。ユダヤ人の母親はとにかく教育熱心だ。

「ジュウィッシュ・ママは日本のように子供がよい大学に入ったぐらいでは満足しない。大学の医学部や法学部を首席で卒業するくらいでないと納得しないのです。ユダヤ人は、ピープル・オブ・ブック（本の民族）とも呼ばれ、生涯にわたって学び続けることを最重要視しています」（前出・クラーク氏）

数多くのユダヤ人と親交のある外交評論家の加瀬英明氏は、常に他人とは違う独自の立場に身を置こうとするユダヤ人の姿勢に驚嘆している。

「ユダヤ人は知識より知恵を重視する。何を知っているかではなく、知っていることの上に何を築けるかが大事と考えているのです。共通の知識からでも異なる知恵を働かせることは可能です。いかに他人と違うことをするかを考える中から個性が生まれ、新しい発想を得ることができるのです」

ユダヤ人の男の子は13歳になると、聖書の中から自分が選んだ一節を、みんなの前で読み上げる「バー・ミツバ」という儀式に参加する。ただ読むだけでなく、その一節に対する自分なりの解釈を披露しなければならない。13歳にして、すでに独自の見解

を表明することを要求されるのだ。

ヘブライ語の「ヘブライ」とは「対岸に立つ」ことを意味する。彼岸のようすを客観的に見て、それとは違う立場でものを考えるという含意がある。ユダヤ人は生まれながらにして、人と違うことをする者を尊ぶ民族なのだ。学問の世界においても、既存の領域を発展させるタイプより、アインシュタインやフロイトのように、それまで存在しなかった新領域を切り開くタイプが多いのが特徴だ。

「笑い」もユダヤ人成功のキーワードの一つだ。ヘブライ語では、「ジョーク」と「叢知」とは同じ一つの単語である。長く国家を持たず、他国で生きてきたユダヤ人は、ナチスによる苛烈な迫害に代表されるように、常に差別を受けてきた。逆境下で生き延びるため、心の余裕としての笑いを絶やさなかったという。

先のイラク戦争時には、こんなユダヤ・ジョークが流行った。
くフセイン大統領が襲撃されたとの報を受け、大統領の影武者たちが一堂に集められた。司令官が言う。

「よいニュースと悪いニュースの二つがある。まずよいニュースから伝えよう。大統領閣下はご無事である」

影武者たちが、ほっと安堵の声を上げる。

「続いて悪いニュースだ。閣下は爆撃で右脚を失われた」

「……！」>

影武者も右脚を切られるというブラックジョークだ。

笑いには心の余裕を生む以外にも効用がある。笑いを誘うオチには意外性が必要だが、いかに意外性を持たせるかに腐心することが発想を豊かにし、新しいものを生み出す原動力になる。「笑いは知力の砥石^{といし}」と言われるほどだ。チャーリー・チャップリンやダニー・ケイなど、コメディアンも多数輩出した。》

ここでもう一度、顔が汚れている少年はどのようにして自分の顔の汚れに気づき、顔を洗うことができるのかという先の問いに立ち戻ってみる。自分の顔の汚れに自分で気づき、顔を洗うことができるかどうか、自分をユダヤ人として意識し、認めることにつながるといっているように聞こえる。自分の顔の汚れに気づくということは、自分がどのような（タイプの）人間であるかを知ることだ。自分を知らなければ、なにごとにも成就しないということになろう。自分を知らなければ、「教育」が不可欠である。その「教育」は「知識より知恵を重視する」ことであって、「何を知っているかではなく、知っていることの上に何を築けるか」ということでなくてはならない。なぜなら、「教育」とは自分の外に在るものではなく、自分の中に取り込まれることによって内面化され、自分と共に歩きだすものでなければ、「教育」はアクセサリーにすぎないからだ。

顔の汚れている少年が自分の顔の汚れに気づくようになることが、「教育」にほかならない。少年はこれまでの自分の上に、自分の顔の汚れに気づく自分を付け加えるよう

になったのである。その気づきは少年を更に、自分の顔の汚れがどのような汚れであるかへと一層促すだろう。気づきを深めることによって、少年は自分がどんな人間であるかを知りはじめ、自分をまだ自分の知らない自分へと育て上げようとしていくのである。

「いかに他人と違うことをするかを考える中から個性が生まれ、新しい発想を得ることができる」ということは、そういうことであるかもしれない。バカは自分がバカであることがわからない。人は自分がバカであることを知ることによって、バカであることから抜け出そうとする。自分のバカを深く知れば知るほど深く抜け出し、浅ければ浅いほど浅く抜け出す。ユダヤ人は自分のバカを深く抜け出そうとすることにおいて、「教育熱心」であるということなのだろう。

《ユダヤ人に笑いをもたらした迫害の歴史は、同時に、ユダヤ人を成功に導くいくつかの法則をももたらした。たとえば、現在ユダヤ人が大きな勢力を誇る業界も迫害の歴史ゆえに誕生した経緯がある。

「差別を受けていたユダヤ人には、農業や製造業など、就きたくても就けない職業があった。時代時代の主要な産業から遠ざけられていたのです。そのため、彼らは他の人間がやっていない新しい産業を考え出した。いわゆるニッチ（隙間）産業の先駆者なんです。アメリカにおいてユダヤ人はハリウwoodsの映画産業で成功しましたが、これは彼らが興した新しい産業です。デパートもユダヤ人が作り出した。既存のビジネスになかなか参入できないため、新たなビジネスチャンス을自ら開拓せざるを得なかったのです。

大学教授、ジャーナリスト、作家、音楽家、弁護士、医者など、あまたの人材がいますが、共通するのは元手があまりかからないこと。他人のやらない、カネのかからない仕事にどんどん乗り込んでいったのです」（前出・加瀬氏）

逆境こそチャンスという発想の転換ができるかどうか、勝負の分かれ目になるということだ。

迫害が生んだ反権威主義もユダヤ人に独自性を与える要素となった。

「ユダヤ人が二人いると三つの意見が出る」と言われるほど、ユダヤ人は反骨精神にあふれている。権威を重んじない気質が、カール・マルクスのような社会改革者や労働組合を主導したサミュエル・ゴンパーズのような革新的な考えを持つ才人を生み出す素地となっている。

前出・シャピロ氏が言う。

「ユダヤ人の考えの根底には、世界をよくすれば、個人的にも成功するという信仰がある。自分自身を深く見つめ、自分が持っている才能を発見し、その才能を社会に活かすために一生懸命頑張った人が、結果的に成功すると言えるのではないのでしょうか」

権威を重んじないだけに、成功した後も自ら権威になることがないのもユダヤ人の特徴だ。

「どんなに社会的に成功した人間も、一対一の人間関係では気さくで偉ぶることがない。

誰にでも穏やかに接してくれるから好感が持てるんです」(前出・加瀬氏)

ユダヤ人から学べるものの一つに彼らの時間に対する考え方がある。「時は金なり」は誤りだという。理由はこうだ。

「カネは貯めることができるが、時間はできない。カネは人から借りればいいが、時間は借りることができない。人生という銀行にあとどれだけ残っているか、知ることもできない。だから時間こそ重要なのだ」

カネ儲けの極意の一つは、カネに執着しないことにもあるのかもしれない。

もう一つ、ユダヤ人の成功法則として重要なのは人的ネットワークだ。全世界に散らばった同胞同士の交流が数々の成功の礎となっている。

ネットワーク作りの媒介となったのはユダヤ教の教義だ。ユダヤ教では、安息日には仕事をしてはいけないことになっている。仕事について話してもいけないし、仕事のことを考えてもいけない。旅行も禁止されており、旅行を中断して安息しなければならぬ。もし旅行中のユダヤ人が安息日にあるコミュニティを訪れたら、そこに住む人々は、同じユダヤ人として旅人を泊めてやり、きちんと食事をさせてやらなくてはならない。こうしたことを通じて、自然にネットワークができ上がり、長い年月のあいだに強固なものとなっていったのだ。》

「時は金なり」(Time is Money)は周知のように、お金を無駄に費やしてはならないように、時間を無駄に費やしてはならないという戒めである。もちろんユダヤ人は、時間を無駄に費やしてはならない、という戒めに反論しているわけではない。彼らは「時間こそ重要である」ことを人一倍知り抜いているが故に、時間が重要であることとお金が重要であることを直結させているところに、異議を唱えているのだ。カネなどと較べるべくもないほどに、時は重要であるのに、時の重要さをカネの重要さのレベルにまで引き落としてしまう鈍感さに、ユダヤ人は耐えられないのである。定住できる場所を持たずに流浪を繰り返してきたユダヤ人にとって、時ほど重要で信じられるものはなかった。そんな彼らからすれば、「時は金なり」は贅沢な定住者の戯言にしかすぎなかった。カネの重要さは所詮人間界の約束事であって、時は人という生き物の生死にかかわる重要さではないか、というのが彼らの考えであった。

《現代においても、そのネットワークはビジネスに学問に、大きな力を発揮しているという。現在で言うグローバリゼーションをすでに作り上げていたわけだ。経済評論家の荒和雄氏が語る。

「国家のないユダヤ人が民族の結束を保つには、経済力を蓄えるしかなかった。人と人とのつながりを重視して、信頼度の高い商売のネットワークを作り上げたのです。彼らは、仲間うちに各界で活躍する者が出ると積極的に援助を与えた。一族が結集して儲けを生み出し、そのカネで才覚ある人間を支え、自分たちのリーダーとなる人物を養成する。サッカーでたとえるなら、表舞台で活躍する代表チームを支える、サポーター集団

のネットワークをきちんと築き上げた民族なのです」

人脈作りにおけるユダヤ人の姿勢も参考になる。「自分の話した分の2倍、相手の話を聞け」というのだ。口一つに対し、耳が二つあるからという。一大金融王国を築き上げたロスチャイルド家の家訓は「語るなかれ」。まず相手の話に耳を傾ける姿勢が、信用を生み、成功に導いたと伝えられている。

日本でビジネスを興し、成功したユダヤ人を紹介しよう。一世を風靡したテレビゲーム、スペース・インベーダーで有名なゲーム機メーカー「タイトー」の創業者、ミハエル・コーガンもロシア系のユダヤ人だ。やはり新興産業であった遊戯業界で大成功したコーガンは、日本在住の外国人として史上最高額の遺産を遺したという。

経済評論家の芦屋 暁 氏がユダヤ人のビジネス感覚の鋭さについてこう語る。

「長く迫害を受け、定住できない暮らしを続けてきた彼らは、見知らぬ国でどんな状況に置かれても対処できるよう情報と教育を重視してきた。損得勘定に義理や人情をはさまず迅速に判断できるのも強みです。警戒心も強いためリスク管理もしっかりしている。現代ビジネスに必須の要素を長い年月をかけて培ってきた強みがあるのです」

『週刊現代』の記事は、「ユダヤ人に学ぶ 成功するための10の法則」を掲げる。

- 1 知識より知恵を重視せよ
- 2 生涯にわたって学び続けろ
- 3 カネは奪われるが知識は奪われない
- 4 逆境こそチャンスと心得よ
- 5 カネより時間を大事にせよ
- 6 権威を憎み、権威になるな
- 7 笑え
- 8 相手の話は自分の話の2倍聞け
- 9 他人とは違う立場をキープしろ
- 10 元手のいらないことをはじめろ

こうして列記すると、我々がすでによく知っている法則ばかりで、初めて目にする法則はどこにもない。我々はよく知っているけれども、いつでも忘れ去っている法則である。ユダヤ人はそれらの法則を生身に刻み込んで、流浪状態の二千年を生き抜いてきた人々である。それらの法則をユダヤ人は片時も忘れなかったが、ユダヤ人以外の人々はいつも忘れ去っていた。その差が、ユダヤ人と我々を分け隔てているのだ。どうしてユダヤ人は忘れず、我々は忘れてしまうのか。それは、それらの法則を忘れ去ってはユダヤ人として生き抜くことができず、逆にユダヤ人ではない我々は忘れ去っても生きることができたからである。我々についていえば、それらの法則に感心しながらも、それらを忘れ去って生きるほうが気楽であったからにほかならない。少なくとも「権威を憎み、権威になるな」や、「他人とは違う立場をキープしろ」の法則は、生きていくうえに勇

気が不可欠であった。

ユダヤ人はそれらの法則を忘れ去っては生き抜くことができなかった、と書いたが、本当は彼らもまた、我々と同様に忘れ去っても生きることができたのである。二千年もの間、世界各国に離散してその土地土地の人々と交わりながら、溶け込んでいくな、ユダヤ人も我々と同様に、優秀ではないかもしれないが、気楽に生きることができた筈である。しかし、その代償としてユダヤ人であることを忘れ、ユダヤ教を放棄しなくてはならなかった。彼らは何度かその岐路に立たされたと思われるが、その都度改めて自分たちがユダヤ人として、ユダヤ教徒として生きる以外に、人間として生きる価値はないと思い知ったにちがいない。要するに、彼らは単に人間として生きればよいというものではない、ユダヤ人として、ユダヤ教徒として生き抜くところに自分たちの存在価値があることを思い定めた人々であった。

「自分たちの国を持てずに散り散りになっていたユダヤ人にとって、聖書とタルムードこそが祖国で」あり、「子供たちは、親から戒律や慣習について教えられ、ユダヤ教の教会に通ってラビ（ユダヤ教の僧侶）の教えを仰ぐ。そうやって成長するうちに、自分をユダヤ人として強く意識するようになっていく」ということは、「ユダヤ人として強く意識するよう」な生き方をしなければ、ユダヤ人であることはできなくなっていくことであつた。つまり、日本に生まれたから日本人であるというようなことは、国を持たないユダヤ人には当てはまらなかったから、彼らは自らの心の中に「王国」を育てながら、自らをも同時にユダヤ人として育て上げていったといえよう。

東京大学教授の西垣通は同大教授の松井孝典との対談（『中央公論』01・11）で、「IT革命は経済と技術だけではない。それは人間生活のあらゆる面を巻き込む『生活革命』で、地球規模の長期的な文明史的事件と位置づけられる」として、その背後にユダヤ文化をみる。

「ITはアメリカで生まれた技術ですが、その背後には西洋のいわゆる『普遍言語』の伝統があるのではないか——これが私の昔からの主張です。普遍言語とは一種の絶対言語で、一神教的なものです。この世は人間には混沌に見えるが、実はそれを秩序立てて語る聖なる言葉が存在する。それは創造神の声であり、神の声はロゴス（理性、論理）であると。神の普遍的な言語に基づいて物事をとらえるという思考は、やがて宗教だけでなく、現代の諸科学のベースを形成していきます。もともとの思考はユダヤ教から発し、キリスト教やイスラム教へと受け継がれてきたものです。

一つ大事なことは、そういう一神教的な考え方が、世俗化される過程で一般化し、世界中に広がった点です。神を信じない人々にも、物理学、マルクス経済学、フロイト精神分析などは普遍的な論理をもつ学問として受け入れられた。」

「実践的な生活もふくめ、宇宙全体に創造主の神のアルファベットが刻印されており、それを解読していこうという態度ですね。たとえば理論物理学のアインシュタイン、経

経済学のマルクス、精神分析学のフロイトといったユダヤ系の学者たちには、ユダヤ教徒ではなくても共通性がみられます。ユダヤ文化は、土地に帰属しない特殊な文化です。彼らには何千年も前から、抑圧され追放されてきた不幸な歴史がありますから。」

「定住民なら、土地を中心にすべてを循環させればいい。けれど土地を追われた彼らは、財産を持ち運べるものにしないと生きていけない。流浪の民にとって頼れるのはお金（財産）と言葉（知識）だけです。こうして、生活と密着した普遍的な論理、さらに情報を尊重する価値観があらわれるのです。」

コンピュータもそういう思考スタイルと深く関わっている。コンピュータの父といわれるフォン・ノイマンはナチスに追われてアメリカに亡命したハンガリー系ユダヤ人ですが、彼にとってコンピュータとはナチズムや共産主義から身を守るための防衛的機械だった。コンピュータがなければ水爆開発の計算はできなかったのです。コンピュータとは決して単なる計算機械ではなく、人工知能のように、さまざまな論理命題を組み合わせる言語機械です。フランス語でオルディナトゥール（秩序づけるもの）と呼ばれますが、コンピュータとは宇宙に秩序を与える言語機械なのです。」

対談は、ITが「現在、実体経済とかけ離れた投機的な金融経済をつくる道具」として使われつつあるが、「ITによる別の可能性」のアイデアが語られていく。ここで湧き上がってくるのは二つの疑問である。西垣氏も別のところで語っているが、ユダヤ人の悲劇はアウシュヴィッツだけではなく、『屋根の上のバイオリン弾き』の物語でも知られるように、帝政ロシア末期における迫害もひどく、1880年代から第一次大戦にかけ、2、3百万人のユダヤ系難民がアメリカに移住した。この波と、第二次大戦時のドイツ・東欧からの移住の波とが、物理学や情報科学を始めとするアメリカの知の背骨をつくり、前者の代表がサイバネティックスのノーバート・ウィーナー、後者の代表がコンピュータのノイマンである。

最初の疑問は、なぜ優秀なユダヤ人は徹底した迫害を受けてきたのか、ということである。迫害の歴史がユダヤ人を鍛えあげ、成功に導いたことを先にみてきたが、土地に溶け込もうとしない彼らのユダヤ教徒たろうとする頑固さと優秀さがまた、迫害の原因をかたちづくってきたと思われる。おそらく「権威を憎み、権威になるな」という法則を掲げて、時々の権力者にもおもねず、自分たちの教義に固執する姿勢はそれだけでも充分弾圧の理由になっただろうし、更に彼らが自らの才覚を働かせて社会の中に押し上がってくるとなれば、弾圧と迫害がいや増すのも必然であっただろう。

もう一つの疑問は、「知識より知恵を重視せよ」とか「相手の話は自分の話の2倍聞け」などを心掛ける（イスラエルの）ユダヤ人が、どうして隣人であるパレスチナ人に対して、まさに自分たちが受けてきた仕打ちに相当する徹底的な抑圧を行使するのか、ということである。「パレスチナ」問題にみられるイスラエルのユダヤ人の対応は、自分たちが歴史的にされてきたことをパレスチナ人に仕返ししているとしかみえなかった。

少なくともそこには「他人とは違う立場をキープしろ」といった、ユダヤ人をユニークたらしめ、育て上げてきた法則は皆無であった。入植地（の拡大）や分離壁を始めとするユダヤ人たちの数々の愚行をみていると、一体あの聡明なユダヤ人はどこに消えてしまったのかと首をひねらざるをえない。

土地を追われた流浪の民であるユダヤ人にとって、頼れるのはお金（動産）と言葉（知識）だけであり、更にお金ですら奪われると失うものだから、誰も奪うことができない言葉（知識）、すなわち「教育」こそが信を置けるものにほかならなかった。そこに、「生活と密着した普遍的な論理、さらに情報を尊重する価値観があらわれ」ていたが、それはすべて土地を追われる、つまり、国をもたないことが前提とされていた。「ユダヤ文化は、土地に帰属しない特殊な文化」であるが故に、ユダヤ人は不動産に価値を置かなかったが、注意すべきなのはユダヤ人がそのことを望んでいるわけではけっしてなかったということだ。国をもちたくてももつことができなかったから、流浪しつづける中でユダヤ教徒としてユダヤ人としての証を守りながら、祖国建設を夢見つづけてきたのである。

そんなユダヤ人に安住できる「約束の地」としての祖国が、イスラエルとして建国されたのである。パレスチナ人を追い出すことによって建国したイスラエルのユダヤ人はもはや流浪の民ではなくなり、したがって、不動産に価値を置くような、ユダヤ人以外の人々がそうしていた生きかたへと変換せざるをえなくなった。二千年かけて手に入れた国であり、国土（土地）であった。土地や「カネは奪われるが知識は奪われない」という法則はもう通用しなくなった。これまで何度も土地を奪われてきただけに、その反動として土地に対する執着は強烈であったにちがいない。一度手に入れた土地は二度と奪われないように警戒するだけでなく、中東戦争によって占領したパレスチナの土地も入植地としてイスラエル領土とする、国際法違反の行為まで犯すようになったのである。不動産に価値を置かない文化を育て上げてきたユダヤ人は、イスラエル建国によって不動産に強固に価値を置く文化の創出へと切り換わり、その結末として先住民であるパレスチナ人を迫害して追い出す残虐な仕打ちを行使しているのだ。二千年の流浪の歴史を生き抜いてきたユダヤ人の聡明さは、イスラエル建国を機に一举に愚かさへと反転してしまったように思われてならない。彼らの聡明さが「パレスチナ」問題に対して発揮されることが最大に求められているにもかかわらず。

2004年8月1日記